

かな い さこ た にし い せき
金井遙田西遺跡

大崎南土地改良区は場整備事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

1991

津山市教育委員会

序

金井塙田西遺跡は大崎南土地改良区による土地改良総合整備事業に伴って発掘調査された遺跡であります。

金井塙田西遺跡の位置する津山市金井地区には、津山中核工業団地建設に伴う発掘調査等によって多くの重要な遺跡があることが知られています。いわば津山市内における遺跡の集中地区に1つであります。遺跡の立地については以前の調査で大方のところは判明してはおりますが、その広がりについては不明な部分が多く、今回の発掘調査でそれが確認できたことは、津山の文化財保護にとって有意義なものと確信しております。

また、今回の調査によって、津山市内では初の出土である「井戸」が発見され、弥生時代社会の生活の一部を生々とかいま見ることができました。今後の津山市の歴史研究にとって貴重な発見であります。

このように、発掘調査によって得られる情報量の蓄積は、非常に重要なことであると思います。いずれにせよこうして1遺跡の1部を記録保存し、大部分については現状保存できたことは、この上ない喜びであります。

ここに、ささやかではございますが報告書を刊行することにいたしました。各位の御活用をいただければ幸いです。

末筆ではございますが、発掘調査から報告書作成にいたるまで多大な御協力をいただいた大崎南土地改良区、並びに関係者各位に対し厚く御礼申し上げる次第であります。

平成3年3月31日

津山市教育委員会
教育長 秋原 賢二

目 次

I. 立地と周辺の遺跡	1
II. 調査経過	2
1. 調査に至る経過	2
2. 発掘調査の経過	2
III. 調査体制	3
IV. 調査の記録	4
1. 第1地点	4
2. 第2地点	7
3. 第3地点	8
4. 第4地点	14
5. 第5地点	15
6. 第6地点	21
V. まとめ	22

例 言

1. 本書は大崎南土地改良区の実施する構造改善事業に伴って調査を行った金井畠田西遺跡の発掘調査報告書である。
1. 発掘調査経費は、その75%を大崎南土地改良区が負担し、残りの25%を国庫補助事業とした。
1. 発掘調査は津山市教育委員会文化課主事保田義治が担当した。
1. 本書に用いたレベル高は海拔高である。また、方位は平面直角座標系第V系の北である。
1. 本書では遺構配置図等に遺構の略称を用いた。略称名は次のとおりである。
S H：住居址、S B：建物址、S K：土壤、S T：段状遺構
1. 本書第2図に使用した「金井畠田西遺跡と周辺主要遺跡分布図」は建設省国土地理院発行2万5千分の1（津山東部）を複製したものである。
1. 遺構の実測は保田、事務員木村祐子が担当した。また、遺物の実測、遺構・遺物のトレスは保田・木村・野上恭子が担当し、福田正雄氏に指導を受けた。
1. 本書の執筆及び編集は保田が担当した。
1. 出土遺物及び図面は津山弥生の里文化財センターに保管している。

I. 立地と周辺の遺跡

金井塗田西遺跡は岡山県津山市金井 219-1 他に所在する。

岡山三大河川の1つ吉井川は中国山地の上斎原村にその源を発し、津山盆地で東へ進路を替える。盆地の東岸で支流の加茂川と合流して再び南下し、瀬戸内海へそいでゆく。その合流点には和気山から北へ向かって、幾本もの丘陵が派生している。金井塗田西遺跡はその丘陵の北東ものの上に位置する。

金井塗田西遺跡はその丘陵のほぼ頂部にあたり、さらに細かな尾根が北西方向へ派生する。調査区には2本の小丘陵が確認され、第1~3地点が西側の、第4~6地点が東側の小丘陵上に位置している。

金井塗田西遺跡周辺は津山市のなかでも最も遺跡の密度が高いところの1つである。最も古い時期のものは、崩レ塚古墳の下層から縄文時代前期の土器が疊群とともに出土している。また、金井から瓜生原にかけての丘陵上にはかなりの数の「陥し穴」土壙が確認されている。弥生時代には中期中葉頃から丘陵上に大きな集落が営まれるようになる。西吉田遺跡、一貫西遺跡、金井別所遺跡、深田河内遺跡等である。弥生時代後期になっても、一貫東遺跡、大畠遺跡、小原遺跡のように依然大集落が形成されている。ここで注目されるのは中期と後期では同一丘陵上に複合して立地しない点である。古墳時代になると4世紀の日上天王山古墳をはじめに多くの古墳・古墳群が造られるようになる。5世紀の一貫東古墳群・6世紀初頭の茶山古墳群等が認められる。6世紀の後半には横穴式石室の古墳が造営される。クズレ塚古墳は津山市の中でも最大規模の陶棺古墳であり、隣の柳谷古墳からは銀象嵌頭椎大刀の柄頭が出土している。また、金井古墳群・植木古墳群等の古墳群も周辺の丘陵上に立地する。さらに周辺には製鉄に関する遺構等も多く検出されており、鉄の産地の1つであったことを示唆させる。奈良時代にはいると、この地域に美作国分寺及び美作国分尼寺が造営されていることから、この地域が古代において重要なところであったことを窺わせるものである。



第1図 金井塗田西遺跡位置図

- | | |
|------------|-------------|
| 0. 金井塙田西遺跡 | 12. クズレ塙古墳 |
| 1. 中原遺跡 | 13. 崩レ塙遺跡 |
| 2. 金井古墳群 | 14. 柳谷古墳 |
| 3. 植木古墳群 | 15. 大畠遺跡 |
| 4. 一貫東遺跡 | 16. 小原遺跡 |
| 5. 一貫西遺跡 | 17. 隈里古墳 |
| 6. 茶山古墳群 | 18. 長畝山古墳群 |
| 7. 西吉田遺跡 | 19. 美作国分寺 |
| 8. 深田河内遺跡 | 20. 飯塙古墳 |
| 9. 別所谷遺跡 | 21. 美作国分尼寺 |
| 10. 金井別所遺跡 | 22. 日上天王山古墳 |
| 11. 崩レ塙古墳群 | 23. 日上和田古墳 |



第2図 金井塙田西遺跡と周辺主要遺跡分布図(S = 1 : 50,000)

II. 調査経過

1. 調査に至る経過

津市金井、中原一帯において土地改良総合整備事業が計画され、昭和63年8月22日付けで大崎南土地改良区理事長本山明から、文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。それにより、昭和63年10月24日から平成元年2月3日まで、岡山県古代吉備文化財センターが当該地の確認調査を行った。その結果、金井地区はかなり広い範囲について包含層及び遺構が遺存していることが明らかとなった。（註1）

それを受けて、平成3年度工事着工分については、平成2年度に発掘調査を行う協議がなされ、平成2年3月15日付けで、大崎南土地改良区理事長本山明から文化財保護法第57条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘届が提出された。それに伴い、津市教育委員会は文化財保護法第98条の2第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を文化庁長官に提出した。

また、経費については「農業基盤整備事業等と埋蔵文化財の保護との関係の調整について」の覚え書きに基づき、農家負担分である、25%については国庫補助事業とした。

2. 発掘調査の経過

調査区の設定は次のように行った。まず、第2地点に国土座標を基準に南北の軸を設定し、これを2ラインとした。そのライン上で第2地点の最も北の杭のある東西ラインをHラインとした。南北軸は西から10m単位で1～35を、東西軸は北からA～Zを付け、北西杭の名称をそのグリッドの名称とした。

4月27日～5月2日にかけてバックホーで表土剥ぎ。5月7日から作業員動員。第2・4地点の調査から開始し、第1地点、第3地点と調査を進めた。6月19日に第6地点の西側の調査を終了し、受託事業分を完了した。国庫補助分は6月25日から開始した。

第6地点東側の確認後、第5

地点に着手、井戸を検出した。7月26日から近藤義郎岡山大学名誉教授、鎌木義昌岡山理科大学教授、水内昌康岡山県文化財審議委員の三先生に調査指導を受け、相前後して新聞発表。7月28日には現地説明会を実施した。7月31日には現地の発掘作業を終了し、井戸等の測量を行った。その後、地元住民からの要請もあり、12月20・21日に補足調査を実施し、平成3年1月30日には再度バックホーにより、第5地点を埋め戻し、調査の全工程を終了した。

(注1)内藤善史「友野敷市地 中原遺跡ほか 土地收回総合整備事業に伴う確認調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』(岡山県教育委員会 1989)



第3図 金井達田西遺跡 地点位置図(S = 1 : 5,000)

III. 調査体制

発掘調査は津山市教育委員会が主体となり実施した。調査体制は下記のとおりである。

発掘調査主体 津山市教育委員会

教育長 萩原賢二

教育次長 藤田公男

参事兼文化課長 須江尚志

文化課長補佐 初山三千鶴 (H.2.10.1～)

文化係長 " (～H.2.9.30)

調査担当 主事 保田義治

整理担当 主事 保田義治

事務員 木村祐子

整理員 野上恭子・岩木えり子・家元博子

発掘作業員 赤松国幹・芦田和子・芦田露子・安東千代乃・片山泰・片山久子

清原可一・小林信・小山職司・下山よし子・森本惣一 (50音順)

IV. 調査の記録

1. 第1地点

第1地点の概要（第4図） 第1地点は金井塗田西遺跡の西地区の最も南側に位置する。K-M-3~4区にまたがって所在し、189.0 m²を測るやや扇形をした調査区である。丘陵部の東斜面にあたり、西から東に向かって急激に傾斜した地形である。

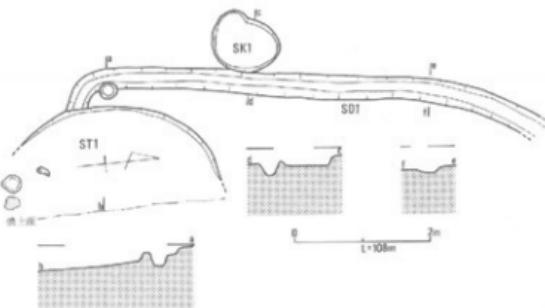
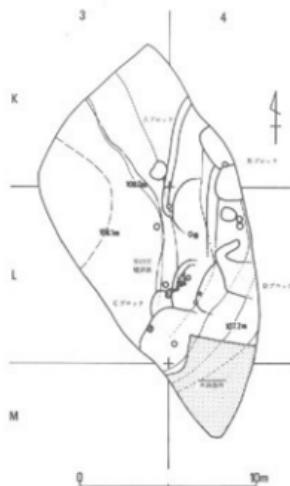
調査区の北西部は最近の水田造成のため、広く削平を受けていた。そのため、遺構はそれよりも東側の斜面に片寄って出土している。遺構は段状遺構7、溝3、土壌2、炉2と数基のピットである。それぞれが複合しあって出土しているが、ここでは便宜的に東西南北のA~Dの4つのブロックに分けて説明する。

A ブロック (第5図) 調査区の北西部で傾斜もまだ緩やかな部分をA ブロックとした。段状遺構1、土壌1、溝1で構成される。幅3mに渡って斜面を「L」字状に削平した段状遺構(ST 1) の平坦面にはわずかに焼土面が認められた。その上方に取りつく幅30cmの溝(S D 1) は北東方向にやや下がって、調査区外に伸びる。80×100cmの不整楕円形の土壌(SK 1) はそのSD 1の西側に接して検出された。いずれもその埋土及び包含層中から中世の勝間田焼及び少量の鉄滓が出土している。

B ブロック (第6図)

調査区の北東部で傾斜のやや急な部分である。

A ブロックの東下方にあたる一群をB ブロックとした。段状遺構2、土壌1、溝1から構成される。2基の段状遺構(ST 2・3) は溝(S D 2) の取りつく付近で複合して

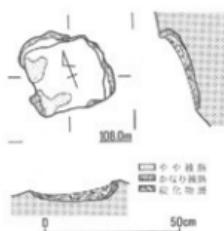


第5図 A ブロック平・断面図 (S = 1 : 80)

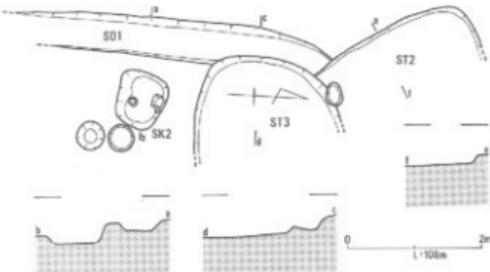
いる。幅は ST 2 が 250 cm 以上、ST 3 が 220 cm を測る。SD 2 は SD 1 と並行しており、幅は 60 cm とこちらの方が広くなっている。SD 2 の東側下位に不整長方形の 70 × 80 cm を測る、土壌 (SD 2) が検出された。土壌には小児頭大の礫が 1 つ出土している。B ブロックも出土遺物から古代～中世期の所産と思われる。

C ブロック (第 7 図) 調査区中央南側のやや高所にある一群を C ブロックとした。段状遺構 3 と炉 2 から構成される。2 つの段状遺構 (ST 4・6) が並んで位置するその間を埋める様にもう 1 つの段状遺構 (ST 5) が位置する。ST 4 は周溝が弧状に巡っており、埋土中から鉄滓が出土している。

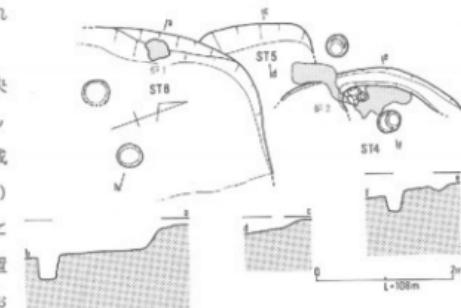
また、その内部から外部にかけて、不整形の炉 (炉 2) が焼礫を伴って検出された。ST 6 にはその削平斜面に複合する形で楕円状の炉 (炉 1 第 9 図) が検出された。炉 1 は 30 × 35 cm の不整方形で、楕円状に掘り凹められ、周囲の壁体に著しい被熱が認められた。埋土は



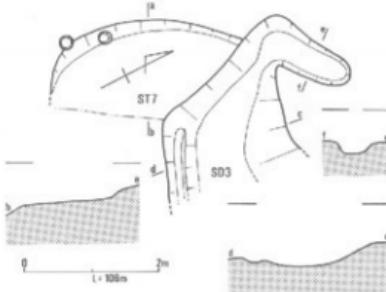
第 9 図 炉 1 平・断面図 (S=1:20) D 7 と ST 3 は複合しているが、明瞭な先後関係は不明である。



第 6 図 B ブロック平・断面図 (S = 1 : 80)



第 7 図 C ブロック平・断面図 (S = 1 : 80)



第 8 図 D ブロック平・断面図 (S = 1 : 80)

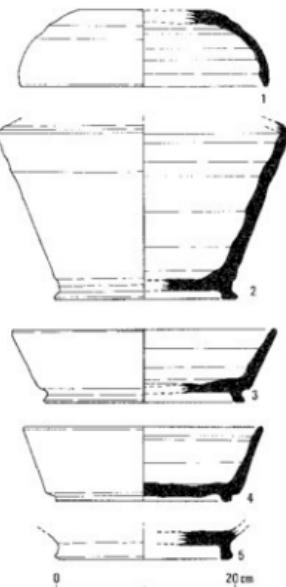
C ブロックの東側下位を D ブロックとした。

段状遺構 1 (ST 7) と溝 1 (SD 3) から構成される。傾斜はここから南東方向にかけてかなり急に落ちていく。ST 7 と SD 3 は複合しているが、明瞭な先後関係は不明である。

いずれの埋土及び包含層中からは中世の勝間田焼が出土している。

第1地点出土遺物（第10図） 第1地点からは古代の須恵器及び中世の勝間田焼が多数出土しているが、図示できた遺物は第10図に示した5点である。1は須恵器の杯蓋である。口縁部径14cmで、器高4.3cmを測る。全面にわたって丁寧なナデ仕上げであり、内外面にナデの凹凸が認められる。2は長頸壺の胴部である。頸部及び口縁部はすでに失われていて遺存していないかった。底部にはしっかりした台が取りつけられており、「ハ」の字状に開いている。そこからやや開きながら直線的に立ち上がって、胴最大径部に至る。胴部最大径は底部から約9cmのところで16.5cmを測り、そこで鋭角に折れ曲がっている。内面にははっきりとした折れ線が認められ、また、断面観察によても粘土を繋いだ痕跡が確認されている。外面調整は丁寧なナデ仕上げである。内面もナデ仕上げであるが、指頭の痕跡が認められる。3～5はいずれも台付き杯である。3は口縁部径が15cm、底部径は11cm、器高は4cmである。やや外反状に立ち上がっており、全面は丁寧なナデ仕上げである。台部は「ハ」の字状に開いており、しっかりした観がある。底部はへら状工具によるケズリが認められ、砂粒の動いた方向は反時計回りである。4は、口縁部径が15.4cm、底部径は11cm、器高は4.2cmである。内外面とも丁寧なナデ仕上げであり、特に内面にナデによる指頭の痕跡が認められる。台部は3ほどしっかりしたものではない。底部にはやはりへら状工具によるケズリの痕跡が認められ、その砂粒の移動方向は反時計回りである。5は、同一器種の底部破片である。そのため、器高は不明である。台部は「ハ」の字状を呈してはいないが、しっかりした作りである。径は10cmを測る。底部にはケズリの痕跡が認められ、その方向は反時計回りである。

以上の遺物はいずれもはっきりした遺構内埋土中から出土したものではない。すべて包含層中からの出土である。よって、各遺構の所属時期を明確にするものではないが、第1地点の遺構群のあり方からみて、本遺物を代表させる時期に連続的に営まれたものと考えていい様に思われる。したがって、第1地点における何らかの製鉄関連の作業は7～8世紀頃に当地で行われていた可能性が示唆される。この結果は、図示できなかった遺物の出土量に比率によっても裏付けられるものである。



第10図 第1地点出土遺物(S=1:3)

2. 第2地点

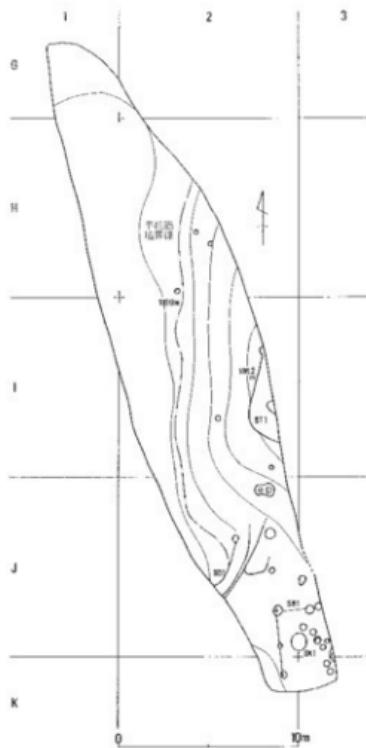
第2地点の概要（第11図） 第2地点は金井遙田西遺跡の西地区の中央部に位置する。その南辺が第1地点の北東辺と接する。G～K・1～3区にまたがって所在し、285.8 m²を測る。北西から南東へかけて長く伸びる、やや柳葉形をした調査区である。丘陵部の東斜面で、西から東に向かって急激に傾斜した地形である。

この西側は農道を隔てて、津山中核工業団地であり、この丘陵は一貫東遺跡としてすでに発掘調査が行われている。その際には、5世紀代～6世紀の古墳群と弥生時代後期の集落址が検出されている。また、金井遙田西遺跡第2地点に最も近接した所からは土墳墓群が出土しているため、今回の調査でその続きが期待された。しかしながら、農道よりの部分は水田の造成の際に削平されており、遺存していなかった。即ち、2ライン束3～4mより西はことごとく削平されており、全ての遺構はそれより東に遺存していた。

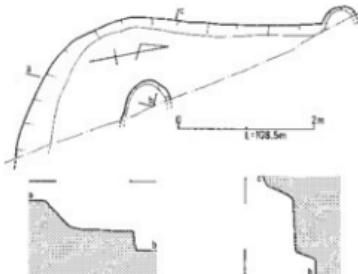
検出された遺構は、段状遺構1（ST1）、建物址1（SB1）、土壇1（SK1）、溝1（SD1）と十数基のピットである。

段状遺構（第12図） 調査区の中央東の調査区外に伸びるように検出された。等高線に対し平行に、方形を意識して斜面を削平しており、長辺3.5m以上、短辺1.5m以上を測る。平坦面には径65cmのピットが1基検出された。壁体溝は検出されなかった。

出土遺物は図示できるものはなかったが、埋土中から土師器が出土しており、古墳時代～古代の所属と考えられる。また、段状遺構としたが、調査区外に伸びる部分を推定すれば、建物



第11図 第2地点全体図(S=1:300)



第12図 段状遺構1平・断面図(S=1:80)

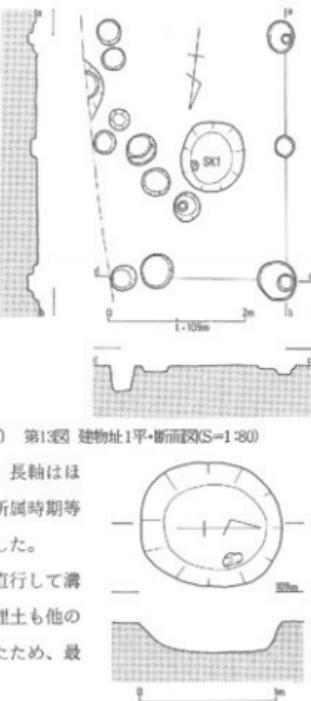
址もしくは住居址になる可能性も考えられる。

建物址（第13図） 調査区の南端の平坦部で、第1地点に近接した所から検出された。1間（以上）×2間（以上）の建物址である。径50cm前後を測る柱穴が直行する位置に出土しており、桁行に相当する柱穴からは柱痕と考えられる径20cmの小ビットが確認された。調査区外に伸びる可能性も示唆されるが、現状では棟間1.9m、桁行3.5mを測る。上面が削平されているため、各柱穴とも深さは10cm前後である。また、SB1が建物址の中央に位置することから、何らかの有機的な関連も示唆される。

柱穴埋土中から遺物は出土していないので、所属時期等は不明である。

土壤（第14図） SB1の中央部に検出された。90×100 第13図 建物址1平・断面図(S=1:80)
cmの楕円形を呈する、現状での深さ20cmを測る土壤である。長軸はほぼ南北を指す。埋土中からは遺物は出土していないので、所属時期等は不明である。床面から浮いた状況で小児頭大の躰が出土した。

溝 調査区南よりに平坦面を作り出すように、等高線に直行して溝が検出された。埋土中に遺物は認められなかった。また、埋土も他の遺構のものとは異なっており、上層の現代の造成土であったため、最近の水田の「まちなみおし」の址と考えられる。



第14図 土壌1平・断面図(S=1:40)

3. 第3地点

第3地点の概要（第15図） 第3地点は金井塙田西遺跡の最も北に位置する。B～D～3～5区にまたがって所在し、335.5 m²を測る菱形をした調査区である。丘陵部の先端にあたり、C～3区からB～2区にかけて丘陵頂部がある。

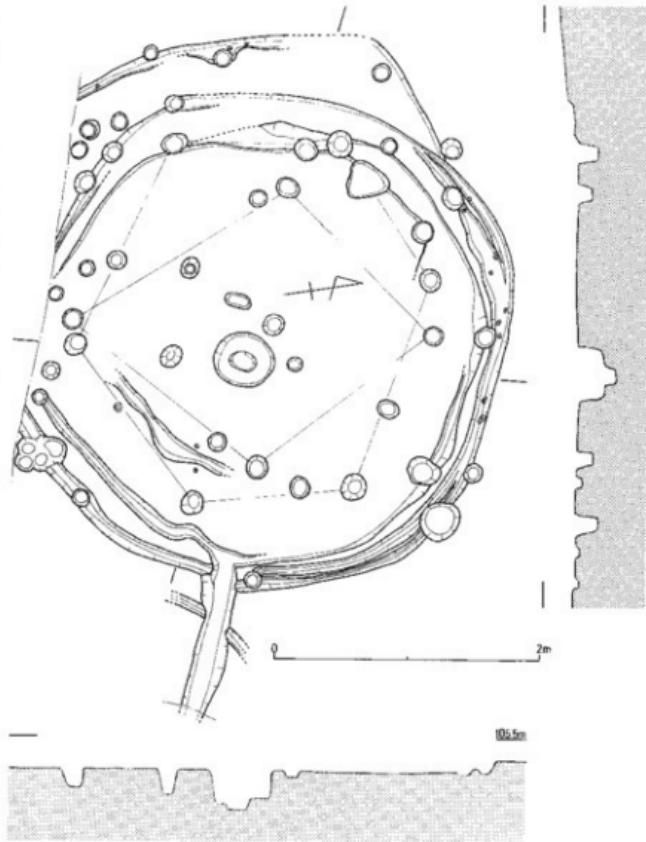


第15図 第3地点全体図(S = 1:300)

遺構は住居址 7、建物址 2 を中心に 100 基近くのビットが全面に検出された。

住居址 1 (第16図) 椰査IXの南東部C・4区に検出された、第3地点最大の堅穴式住居である。最低1回の建て替えを行っている。古段階のものは径 6.2 m を測る円形で、4本柱である。壁体溝が周囲に巡っているが、西側部分ではかなり失われている。その溝は東側の低所から住居外へ伸びており、住居址 7 を切っている。床面には、中央やや東側に中央穴を持っている。新段階のものは径 7.2 m を測る円形で、6本柱である。この建て替えにおいて、古段階の住居は中央穴を残して埋められ、柱も全て新しい位置に付け替えられている。また、西側部分に各柱間から

ら壁体側に
わずかな高
まりが認め
られた。い
わゆる「ベ
ッド状」構
構の可能性
が高い。壁
体よりには
壁体溝が巡
るが、北東
部及び北西
部において
二重になっ
ているとこ
ろがあるこ
とから、再
度の建て替
えもしくは
わずかな修
復の可能性
が指摘され
る。また、
壁体溝内に
径 5 cm 程の



第16図 住居址 1 平・断面図 (S = 1 : 80)

小ピットが数個検出された。何らかの杭痕と思われる。

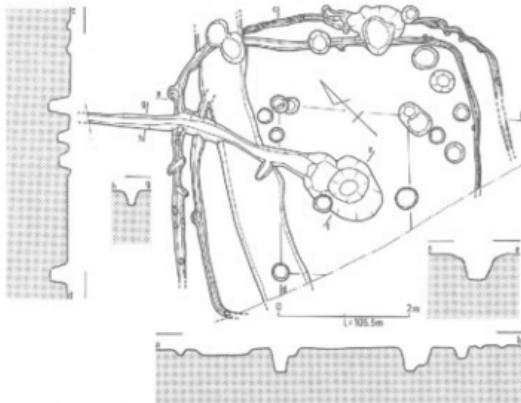
住居址2（第17図） 調査区の南西部C-3区に検出された、隅丸方形の竪穴式住居である。南東コーナーは調査区外にある。最低1回の建て替えを行っており、古段階は一辺4.2mを測る、4本柱である。径1mの中央穴は床面の中央にあり、そこから発した溝は北西に低所に向かって住居外へ伸びている。周囲には壁体溝が巡る。新段階は一辺5.0mを測る、4本柱の住居である。この拡張において、柱及び中央穴いずれも古段階のものを共有している。壁体溝内には住居址1と同様の小ピットが数個確認された。また、遺構検出面が削平を受けて低いため、張り床については確認できなかった。

住居址3（第18図）

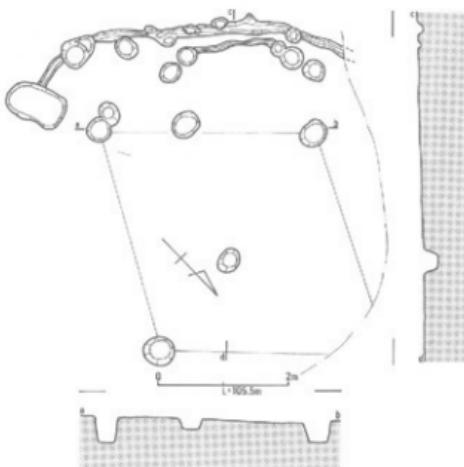
調査区の北西部B-3

区に検出された。隅丸方形に巡る壁体溝が確認されただけなので、規模等は不明である。柱は4本と思われ、内北側1本は調査区外になるものと推定される。各柱穴からほぼ等距離の所に中央穴が確認された。また、南西部に確認された壁体溝が一部二重になっているところがあることから、最低1回の建て替えがあったものと想定される。しかし、その際の移動した柱穴等は何ら確認できなかった。

住居址4（第19図） 調査区の北辺B-3区に検出された、隅丸方形の竪穴式住居である。壁体溝



第17図 住居址2 平・断面図(S=1:80)

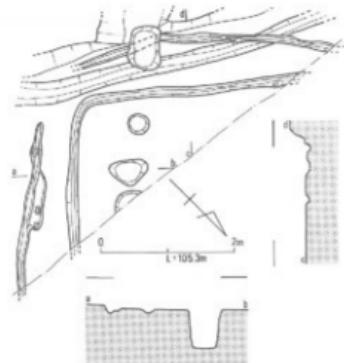


第18図 住居址3 平・断面図(S=1:80)

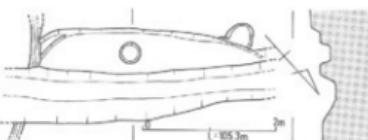
が2本確認されたので、最低1回の建て替えがあったものと考えられる。最近の「まちなおし」のため、大溝を介して北東部が1段低くなっているので、住居埋土はほとんど遺存していなかった。住居の南コーナーのみが調査区内であるため、規模等は不明である。現状では小住居が 3.0×2.2 m以上、大住居では 4.2×3.5 m以上を測る。柱は4本と推定され、その内の1基の柱穴が検出されており、径50cm、深さ60cmを測る。

住居址5（第20図） 調査区の東よりC-5区に検出された。「まちなおし」の上段に弧状を呈して出土した。下段ではその続きは認められなかったので、規模等は不明である。壁体溝は認められなかった。また、この遺構に伴うと思われる柱穴等の施設は一切確認できなかった。但し、平坦面に1基ピットが検出されたが、他の遺構に伴うものと考えられる。SH6と複合しているが、土層観察による先後関係は確認できなかった。本遺構は住居址として報告したが、段状構造として把握できる可能性がある。

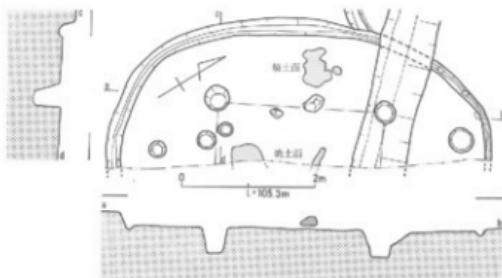
住居址6（第21図） 調査区の東辺C-5区に検出された、円形の堅穴式住居である。住居の西半分の検出で、東半分は調査区外に位置する。径は5.5mを測る。周囲には壁体溝が巡っている。柱は4本と推定される。その内、西側に2本が確認された。いずれも床面から40cmの深さを持つ。柱間は2.5mを測る。床面上には



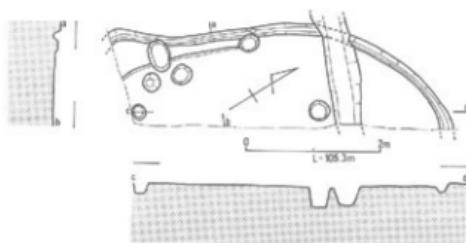
第19図 住居址4 平・断面図(S=1:80)



第20図 住居址5 平・断面図(S=1:80)



第21図 住居址6 平・断面図(S=1:80)



第22図 住居址7 平・断面図(S=1:80)

3ヶ所に焼土面が形成されていることから、本住居址は焼失住居であったものと思われる。

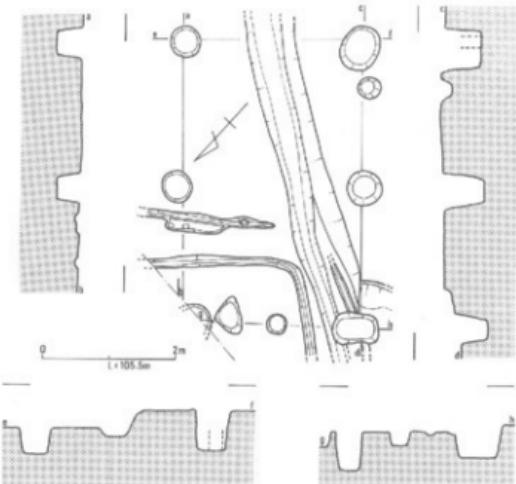
住居址7（第22図） 調査区南東角C～D-5区に検出された円形の竪穴式住居である。周の一部のみの出土であるので、詳細な規模等は不明である。推定径5.5mと思われる。壁体溝は1本巡る。SH1の溝に切られているので、それよりも古いものと思われる。柱は不明であるが、現状で検出されているものを当てれば、4本になるものと想定される。その際には柱間距離は2.7mを測る。

建物址（第23図） 調査区に北辺で、SH4に一部複合してその東側に検出された。B-4～5区である。1間×2間の建物址で、時期、形態等からみて「高床倉庫」の跡と考えられる。梁間は東で2.7m、西で2.6mを測る。桁行は両側とも4.3mを測り、平均柱間は2.15mと桁の方がやや短くなっている。柱穴は平均径50cmで、北角の1基は半分が調査区外に存在している。柱穴底レベルは標高104.5mで掘っており、現状での深さは上段で60cmを測る。SH4と切りあっており、SB1→SH4の順序が確認された。なお、この建物の主軸は尾根線に直行している。

建物址2（第24図） 調査区中央西より、C-3～4区に検出された。1間×2間の掘立柱建物である。梁間はいずれも2.5m、桁行はいずれも5.0mで、柱間距離は2.5mを測る。柱穴は径40cm前後で、深さは平均50cmである。埋土には焼土塊と炭化物が詰まっており、付近の土壤内からも検出されていることから、恐らく焼失したものと考えられる。また、1個体分の勝間田篠の大甕に破片がそれぞれの柱穴内埋土中から出土している。のことから、本建物の所属時期は中世期であり、本建物を建築する際に何らかの祭祀が行われたことが示唆される。

第3地点出土遺物（第25図） 第3地点からは19点の土器が図示できた。

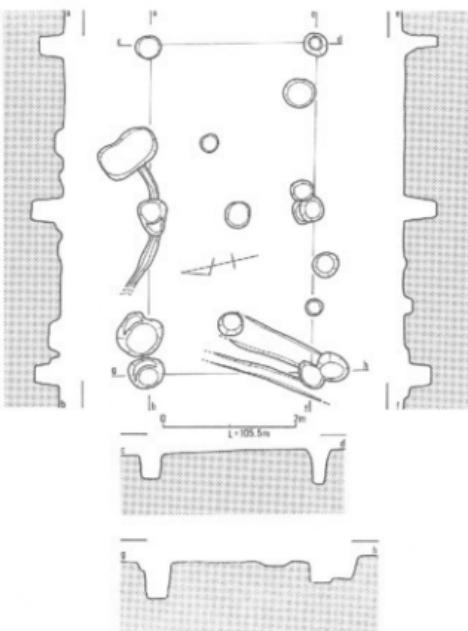
1～7はSH1の出土遺物である。1～4は口縁部片である。いずれも「く」の字状に外反し、口縁端部はやや肥厚させており、1の上方へ拡張せるもの、2・4の上下に拡張するものがある。3・4は端面に数



第23図 建物址1平・断面図(S=1:80)

条の凹線文を施している。5はピット内から出土しているが、本ピットは住居の柱に使用されていない。新しい時期のものと思われる。6は高杯形土器の脚部である。内面はヘラケズリ、中位に円形の穿孔が認められる。8~12はSH4に伴う遺物である。8・9・11は口縁部である。いずれも「く」の字状に外反し、端部を肥厚させている。内面は屈曲部周辺までヘラケズリが認められる。外面には9のようにハケ目の観察できるものもある。10は底部片である。内面にはヘラケズリが認められる。12は高杯形土器の脚部片である。脚端部は肥厚されており、その上外面には数条の凹線文が認められる。

19はSH7に伴うミニチュア土器



第24図 建物址2平・断面図(S=1:80)

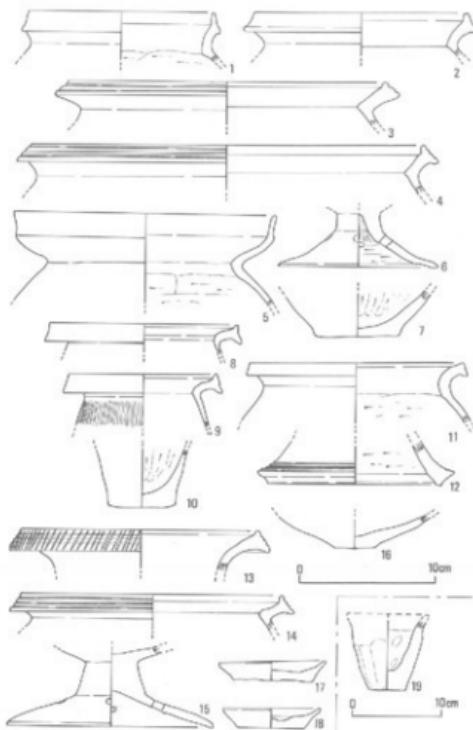
である。外面はヘラ状工具によるケズリの痕跡が認められる。内面には指頭圧痕を確認することができた。13~18は各ピット内出土の遺物である。いずれも竪穴式住居もしくは建物に使用されていないピットである。13・14は口縁部片である。外反した口縁部は端部を肥厚させ、やや上下に拡張を示している。端面には凹線文をもっている。また、13はさらに連続刺突文も施している。15は高杯形土器の脚部片である。柱状の軸部から急激に開いた脚部は、端面を丸く収めており、中位には円形の穿孔が認められる。外面には丹塗りの痕跡も確認できた。16は底部片である。17・18は土師質土器の小皿である。

以上、図示できた遺物の所属時期をみてみたい。まず、端面に凹線文をもつものからは、弥生時代中期的な要素を見て取ることができる。しかし、内面のヘラケズリが口縁部の屈曲部周辺にまで至っていることから、やはり弥生時代後期前半の所産と考えられる。但し、13のように端面に連続刺突文が認められるものは、中期の後葉である可能性が強いものと思われる。5は二重口縁を呈しており、またかなり外反気味に立ち上がっていることから、弥生時代後期の後半の所産の可能性も示唆される。17・18は形態や胎土からみても、中世期の所産であると考えていいように思われる。

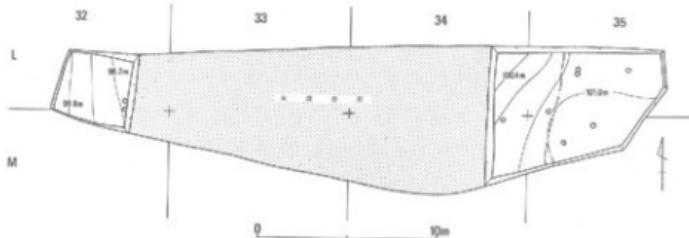
これらの結果から、第3地点においては弥生時代後期前半にまで集落が営まれていたものと考えられる。さらに、中世に至って再度集落が営まれるに至る結果となつたものと思われる。これ以上詳細な先後については遺物の量の希少さからみても、ここでは言及できない。

4. 第4地点

第4地点の概要（第26図） 第4地点は金井造田西遺跡の造田地区の最も北に位置する。L～M-32～35区にまたがって所在しており、227.5 m²を測る東西に長い調査区である。2つの小丘陵に挟まれた谷部に位置し、東西両斜面にわずかにピットが検出された。調査区中央はさらに谷が深くなり、土地改良事業にかかる工事削平はそれ以下には及ばないため、大崎南土地改良区と協議をした結果、調査を行わずに埋め戻した。遺物は弥生時代中期～後期の土器片と勝間田焼が少量包含層中から出土しているが、図示できるものはなかった。



第25図 第3地点出土遺物(1~18; S=1:4, 19; S=1:3)
土地改良事業にかかる工事削平はそれ以下には及ばないため、大崎南土地改良区と協議をした結果、調査を行わずに埋め戻した。遺物は弥生時代中期～後期の土器片と勝間田焼が少量包含層中から出土しているが、図示できるものはなかった。



第26図 第4地点全体図(S=1:300)

5. 第5地点

第5地点の概要（第27図） 第5地点は金井遙出西遺跡の西地内に位置する。U～X-29～31Xにまたがって所在し、310.0 m²を測る長方形の調査区である。丘陵部の頂部から東斜面にあたり、西から東に向けて緩やかに傾斜する地形である。30ライン周辺の西側はすでに削平されており、遺構はその東側に集中する。検出された遺構は、土壌2ピット群と「井戸」である。

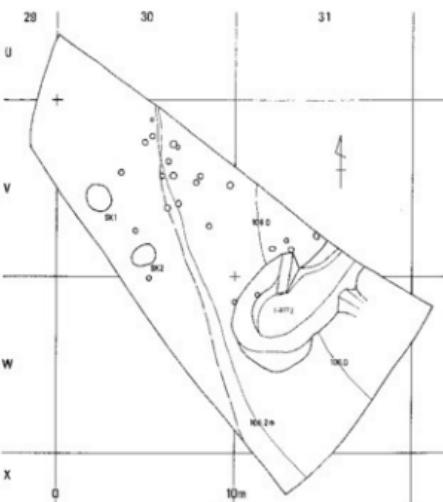
第5地点は第6地点の一部と同様に国庫補助対象地として発掘調査を実施した。

土壌1 調査区の西寄りに検出さ

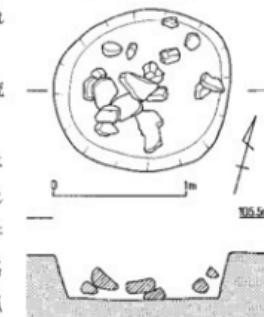
れた。160×140 cmの楕円形を呈する土壌で、現状での深さは約21cmを測る。出土遺物はなかったため、所属時期等は不明である。

土壌2（第28図） SK1の南西約3mのところに検出された。130×110 cmを測る楕円形を呈した土壌である。現状での深さは35cmである。出土遺物は検出されなかつたので、詳しい所属時期等は不明であるが、埋土に弥生時代の遺構に入ったものとは異なり、黄褐色ブロックが多く含んでいることから、新しい時期のものと考えられる。内部には小児頭大から拳人の躰が17個入っていた。床面等に並べられたような形跡は認められなかった。

「井戸」（第29～30図） 調査区の東よりに検出された。流水用溝を下方に付設した大型土壌の、底面に方形木枠を持つ、自然湧水を一時的に貯蔵すると考えられる遺構である。これは下方に溝を持つ性格からみて、灌漑用水の源としても考えられるものである。本遺構の以上の定義によれば、厳密にいって井戸の定義から外れる。（V.まとめにて詳述）但し、的確な名稱に対する私見を持ち合わせていないため、ここでは以下括弧付きの「井戸」と呼称することにしたい。



第27図 第5地点全体図(S=1:300)

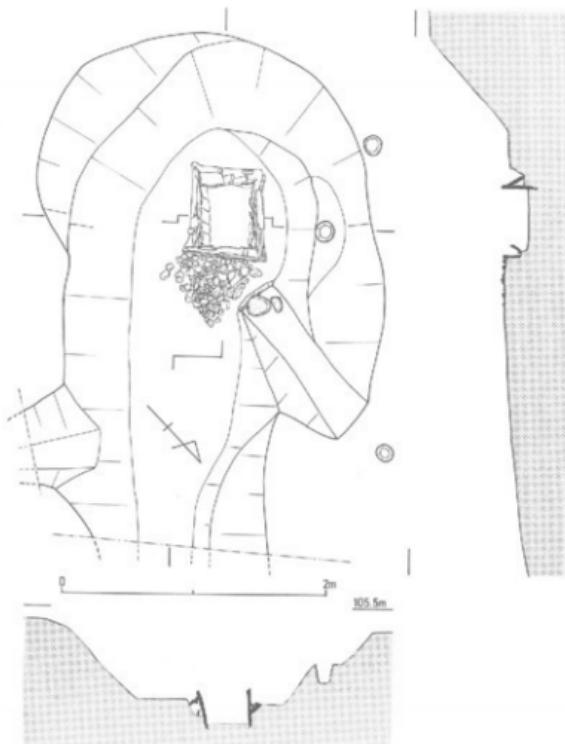


第28図 土壌2平・断面図(S=1:40)

土壤は幅470cm、長さ600cmの馬蹄形を呈しており、南側一部にやや拡張が見られる。深さは約120cmである。西辺は2段掘りを呈する。土壤の西辺で馬蹄形の角部から木枠にむかってスロープが作り出されていた。約32%の斜面（高低差82cm、水平距離240cm）である。その降りきった所には平坦面をもった疊が2個置かれていた。土壤の西辺中段に、水平面を作り出したピットが1基検出された。何らかの上屋を想定できるかもしれないが、対岸には何らピットは確認できなかった。土壤の北東方向、即ち下方に向かって幅約170cmの溝が検出された。しかし、調査区外に続いているため、調査区内にある約2mを検出したにすぎない。その溝の中段に東方向へ伸びる溝も検出したが、これも調査区外に伸びており、その一部だけを検出した。土壤の床面は粘土層であり、約40cmの高さまで青色のグライ化をしていた。

土壤底面のはば中央部に方形の木枠が確認された。木枠の掘り方は長方形で、長軸140cm、短軸100cmを測る。

枠内法95×60cmでやや湾曲した杉材が北西辺を除く3辺に立てられていた。長軸両辺に5枚ずつ、南北短辺に4枚の計14枚である。枠内底面から10~15cm程度中に差し込んでおり、掘り方との間を木材で裏込めてあった。東側長辺は板材及び丸太材であった。南北辺はやや湾曲した杉材で立板を支えていた。北西短辺は2枚の板材で枠を組んでいた。その内、北側の材には焼きが入っており、強化されていた。



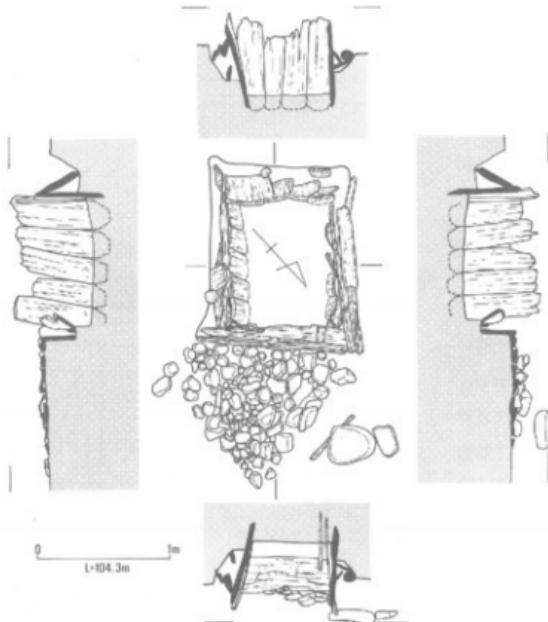
第29図「井戸」平・断面図(S=1:80)

北西辺を除く3辺の底部からの復元高は60cmを測る。北西辺の高さは40cmであり、その差20cmを利用して下方へ水をオーバーフロウさせたものと考えられる。北西辺の北西側には小兒頭大から拳大の円錐が、幅100cm、長さ100cmの三角形の平面形を呈するように數き詰められていた。それは、溝方向に向かってやや傾斜しており、次第に消失していく形状を呈する。また、板材の出土状況から、本来はこの場所に作業場的な施設があったものと想定される。

遺物出土状況 大きく2者の遺物が出土している。まず、上層に多く検出された須恵器並びに中世土器（第32図）である。これは土壇の中央部の最も凹んだ所に包含されており、大型の甌を伴って検出された。須恵器では大甌の他、蓋杯が20数点、高杯が10数点出土している。いずれも遺構等に伴った状況ではないことから、後世の流れ込みの可能性が高い。もう1者は弥生中期～古墳時代初頭にかけての土器（第31・33図）である。これは、「井戸」埋土下層の粘土質の土層の中から多く出土している。整理箱7箱を数える。最も多いものは古墳時代初頭と考えられる土器片で、器種では高杯が目だっている。また、ミニチュア土器も数点出土床面から出土している。土壇底部直上や木棒と裏込めの間から出土しているものがほとんど弥生時代後期終末～古墳時代初頭の時期の土器であることから、この遺構の造られた時期はおよそその時期に比定していいようと思われる。その他この時期の遺物はかなり少ないとあり、他からの混入と考えられるものである。

出土遺物（第31図～第34図） 第31図は弥生土器並びに土師器である。多数出土しているが、出土遺物の一部を図示した。

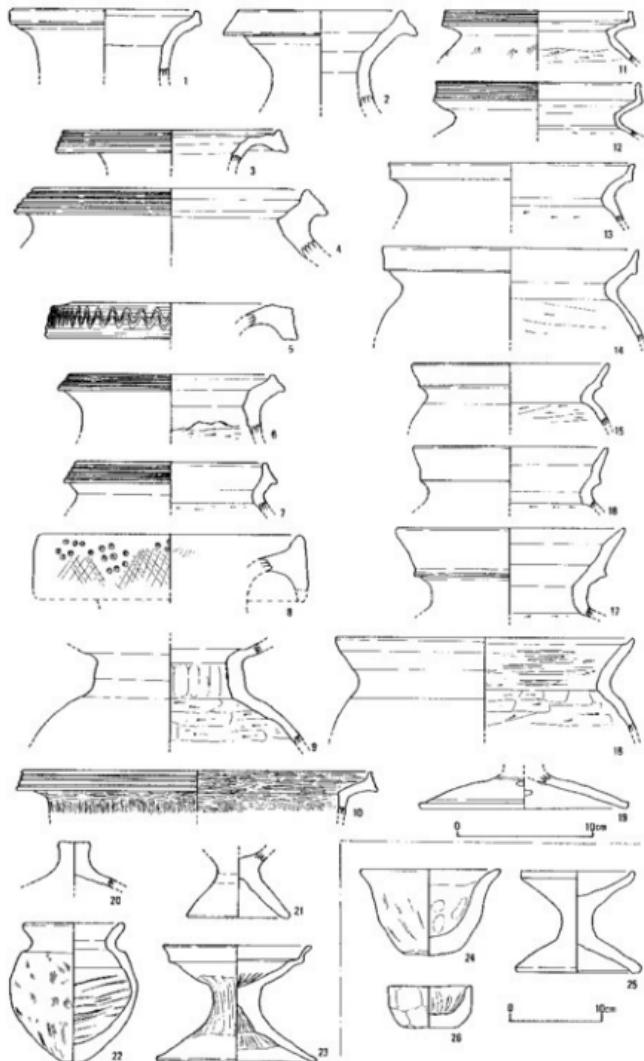
口縁部にはいくつかのバラエティーが認められる。頸部から直線的に外反し、端部を拡張させるもの（1・2）、「く」の字状に外反し、端部に装飾をもつ



第30図 「井戸」 桟平・断・立面図(S=1:40)

もの（3～7）、11・12のように岡山県南では「ぼうぶら」の俗称で知られているもの、13から18にかけては、2重口縁部が短くやや外反気味なものから、長くかなり外方に広がるものへ、さらに「く」の字状に屈曲する単純口縁のものまでを並べた。8は器台形土器の口縁部で、端面には竹管文と鋸齒文が認められる。

10は鉢形土器の口縁部



第31図 「井戸」出土遺物1(1~23; S=1:4, 24~26; S=1:3)

であり、内面には顕著なミガキが認められる。1～5が弥生時代中期の、6～18が古墳時代の所産と考えられる。22～26はミニチュア土器である。

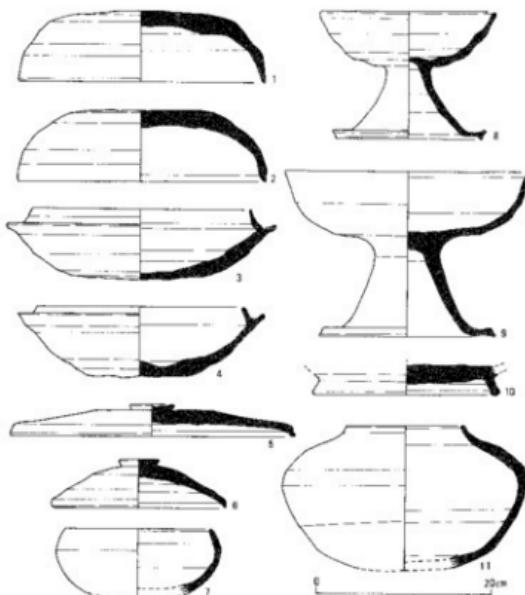
第33図は粘板岩製の石庵丁の欠損品である。

第32図は上層出土の須恵器及び須恵質土器である。

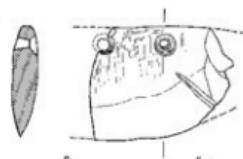
1～4は蓋杯であり、陶邑編年のTK 209に比定されるものである。8・9は高杯形土器で、蓋杯と同時期と考えられる。5～7、10・11は7世紀後半～8世紀にかけての土器と考えられる。これはいずれも欠損品である。

第34図は「井戸」の木枠に使用（転用）された木器である。1～3は木枠の立板である。凸面を内側に向けて樹立していた。桶の転用

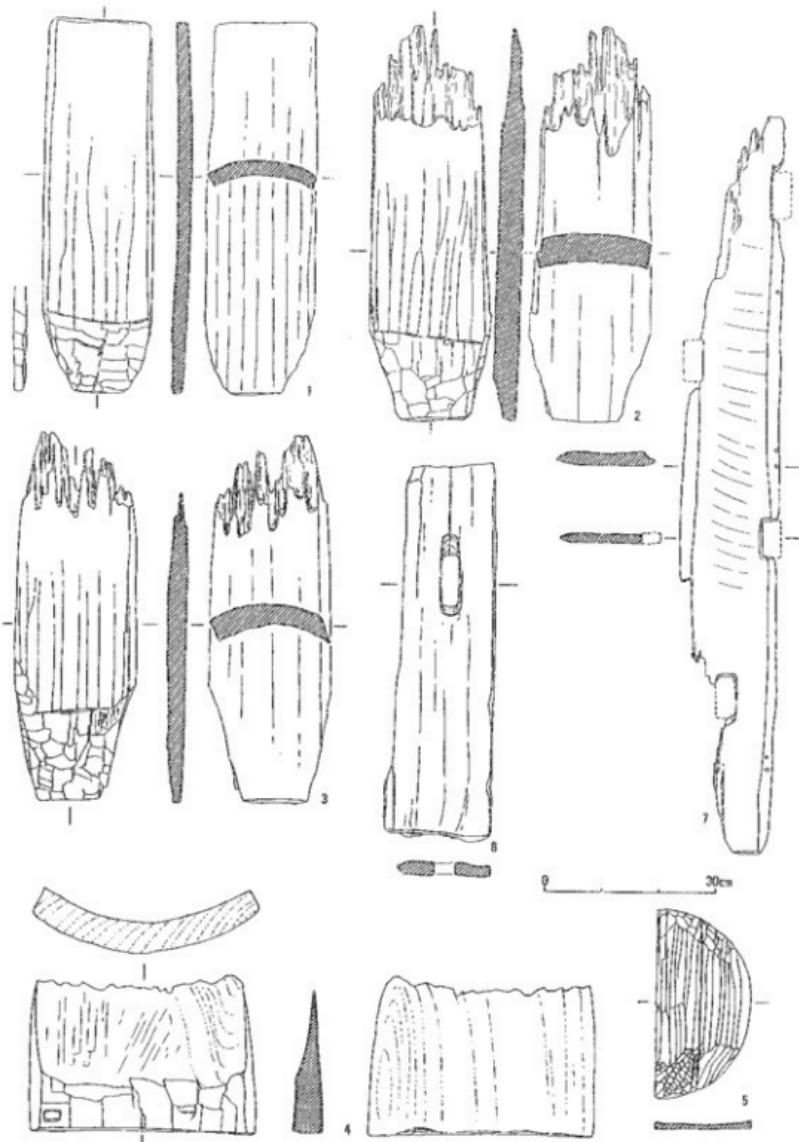
と考えられる。大きく2種の桶を転用しており、1のように薄手のものと2・3の厚手のものが認められる。桶の高さは約70cmを測り、径は1で32cm、3で36cmを測る。板の下5分の1をやや厚めに作って底板を置いていたものと思われ、その部分を削って木枠材に転用している。工具は、桶作成時にはヤリガンナ状のものを、転用時にはノミ状のものを使用している。4は南西部短辺の裏込めに使用していたもので、これも桶の転用材と考えられる。1～3よりもやや浅めのものである。下端に1ヶ所ホゾ穴があけられていたが、恐らく桶作成時のものであろう。内面には桶作成時の工具の痕跡が確認された。1～4の桶内面部にはいずれも黒色の顔料状のものが付着していた。5は裏込め内から出土した桶の底板である。径が小さいので前述以外の桶を想定する必要がある。表面一面には工具による精緻な痕跡が確認された。6・7はいずれも遊離出土の板材である。6にはほぼ中央にホゾ穴をあけている。7は4ヶ所にホゾ穴をあけており、板材の端には2つ並んで2ヶ所、1つのものが1ヶ所の計5つの小孔があけてある。いずれも建築材の転用と考えられるが、「井戸」において何に使用されたかは不明である。材質は1～6ガスギ材、7がマツ材である。



第32図 「井戸」出土遺物2 (S=1:3)



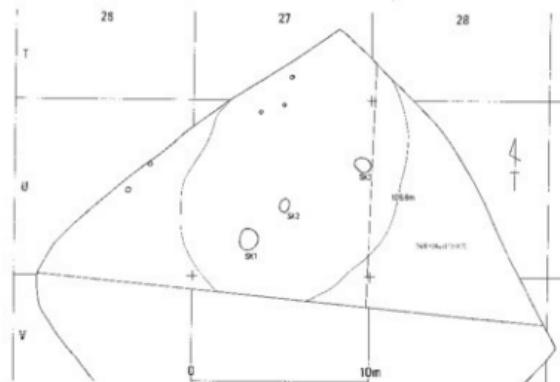
第33図 「井戸」出土遺物3 (S=1:2)



第34図 「井戸」出七遺物 4 (S = 1 : 10)

6. 第6地点

第6地点の概要（第35図） 第6地点は金井道出西遺跡の造田地区の最も南の最高所に位置する。T～V-26～28区にまたがって所在し、225m²を測る三角形をした調査区である。丘陵の頂部にあたる。



第35図 第6地点全体図 (S = 1 : 300)

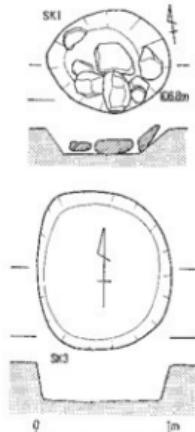
本調査区は岡山県の実施した試掘調査により、第5地点周辺と本地点のさらに高所に遺構が発見されていることから、本調査を実施したものである。しかし、全面にわたって最近の水田造成にための削平を受けていたため、遺構としては土壤3（SK1～3）と5基のビットのみの出土であった。

また、本地点は全体図の2点破線より東側を国庫補助対象地として調査を行ったが、何ら遺構は発見できなかった。

土壤1（第36図） 調査区の中央東より、国庫補助対象地に検出された土壤である。平面形は梢円形で、95×75cmを測る。内部には拳大から小兒頭大の礫が8個はいっていた。現状での深さは15cmであるが、上面がすでに削平されていることから、本来はもう少し深かったものと考えられる。所属時期は出土遺物から中世期と考えられるが、図示できる遺物はなかった。

土壤2 調査区のはば中央に検出された土壤である。70×50cmの梢円形を呈するもので、他の2つよりやや小さ目である。現状での深さは20cmであるが、SK1と同様、本来はもう少し深かったものと想定される。出土遺物がないため、詳細な所属時期等は不明であるが、埋土の状況から、SK1と同時期と考えられる。

土壤3（第36図） SK2のさらに南西部から検出された。梢円形を呈し、130×100cmを測る。現状での深さは30cmである。3つの中では最も大型であるが、遺物はなかった。しかし、埋土の状況から同一時期と考えられる。



第36図 土壌平・断面図 (S = 1 : 40)

IV. まとめ

1. 弥生時代の集落について

金井透田西遺跡の発掘調査によって、弥生時代の集落が確認できた地点は第3地点だけである。第3地点は西地区にあり、以前に調査の行われた「一貫東遺跡」（註1）と同一の丘陵上であり、その先端部に位置している。そのため、一貫東遺跡における集落の続きを考えていいように思われる。

第3地点には7軒の住居と1棟の高床倉庫が検出されている。但し、竪穴式住居としては不明量なSH5はここでは割愛させていただく。よって、円形住居3軒、隅丸方形住居3軒、高床倉庫1棟の集落構成として考えていきたい。まず、遺物によっては先後関係は把握できなかったことは前述のとおりである。よって、ここでは、造営順序ではなく、その構成についてのみ言及したい。

SH1とSH6とSH7は同時に存在しない。これはすでに「ペア住居」について述べたものに起因する。同様にSH2とSH3とSH4も同時に存在しない。よって、この2者が基本単位となるものと思われる。即ち、この2者がそれぞれの単位の中において建て替えを重ね、数回の集落の様相変化があったものと考えられる。さらに、高床倉庫についてはSH4と重複しているため、同時併存の可能性はない。よって、SH4が営まれているときには、どこか別な場所に高床倉庫があったものと想定できるのである。以上の事実と推定から、少なくとも第3地点においては最低2軒の住居と1棟の高床倉庫が同時に存在していたことになる。

但し、これが集落全体とは到底考えられず、この結論は周囲の更なる調査が行われるか、もしくは一貫東遺跡の研究の進展を待たなければ出ない性格のものである。今後の研究に期待したい。

2. 「井戸」について

第5地点から検出された「井戸」は、さまざまな方向からの今後の研究による課題が含まれているように思われる。このまとめでは、それを抽出していきたい。

まず、「井戸」の定義である。井戸とは「用水を得るために、地を掘って地下水を吸い上げまたは汲み取るようにしたもの」（註2）とある。即ち、地下水が湧いていなければ井戸ではない。この定義にあてはめると、本遺跡の「井戸」は井戸ではないのである。実際の使用方法は不明であるが、天水をためて使用する木棒を持った造構であり、灌漑用水の源である、という近藤義郎教授の意見に賛同したい。そこで、新たな名称であるが、私見を持ち合わしていな

いため、ここでは便宜的に括弧付きの「井戸」ということにして、今後の類例の増加に期待したい。

統いて、この「井戸」の存在意義である。従来からの調査によると、津山中核工業団地、西吉田住宅団地、中原遺跡等弥生時代の集落の調査は金井地区周辺において多数行われてきているにも関わらず、本遺構の類例は一切出土していない。これを当時の生活がほとんど天水もしくは河川に頼っていたものと解していた。しかし、今回の発見のように何らかの形で水源を確保しようとしていたことを確認できたことは、実に意義深いものであると思われる。但し、この「井戸」を使用していた集団の集落が確認できなかったことは、残念である。集落の中における「井戸」のありかたの研究については、更なる出土例を待たねばならない。

結局全てに関わることであるが、本例のような類例が非常に希少であることである。類似したものに岡山県落合町の下市瀬遺跡（註3）のものがある。しかし、下市瀬遺跡のものは実際に水が湧き出すものであり、基本的に異なっている。従って天水潤的な「井戸」はこの周辺においては初例である。今後の資料増加に期待したい。

最後に転用材である。今回の調査で「井戸」枠は樋の転用材であることが判明している。同時にその加工技術には多くの研究課題が内包されている。今後の更なる研究に期待したい。

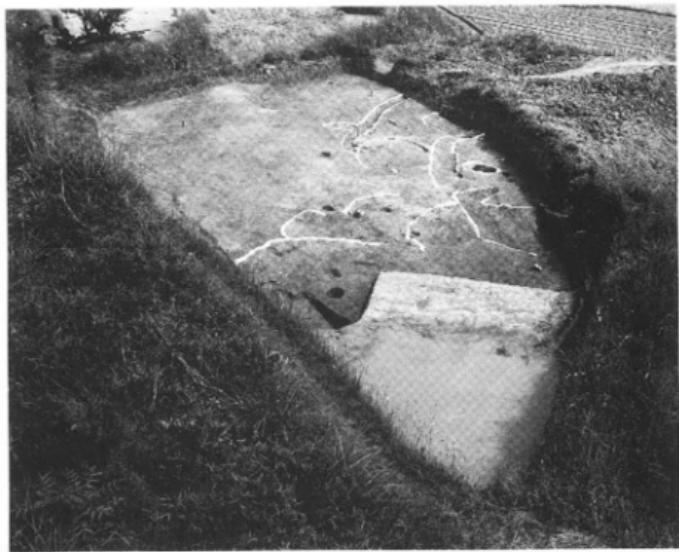
以上、今後の課題のみを列挙したが、今回の発見が今後の研究の第一歩になるよう大いに期待するものである。

（註1） 一貫東遺跡は津山中核工業団地造成に伴い昭和60～61年度に津山市教育委員会が発掘調査を実施した。報告書未刊。

（註2） 新村出編『広辞苑』岩波書店。

（註3） 「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査1』「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(3)』1973





第1地点 全景（東から）



第1地点 全景（西から）



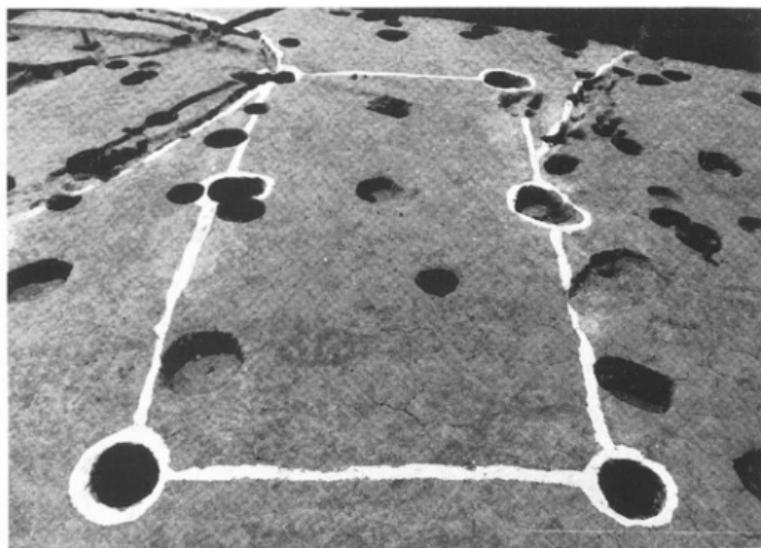
第2地点 全景（北から）



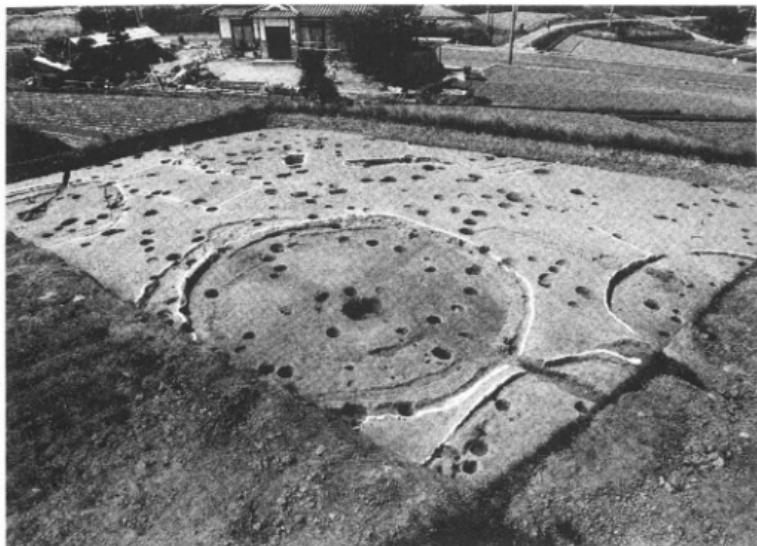
第2地点 段状遺構 1（北から）



第3地点 全景（南東から）



第3地点 住居址1（南東から）



第3地点 住居址2（北から）



第3地点 建物址2（東から）



第4地点 東区全景（西から）



第5地点 全景（東から）



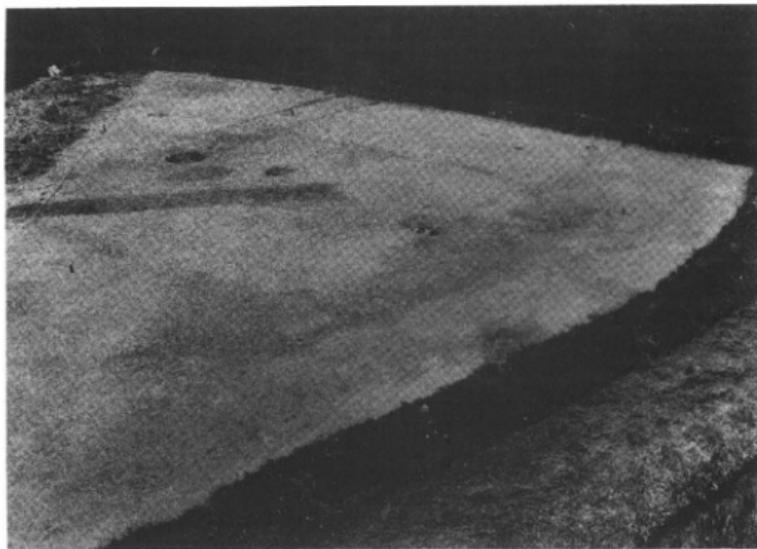
第5地点 「井戸」全景（北から）



第5地点 「井戸」全景（東から）



第5地点 「井戸」木枠



第6地点 全景（東から）



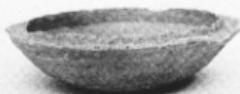
1



3



8



4



22



24



23

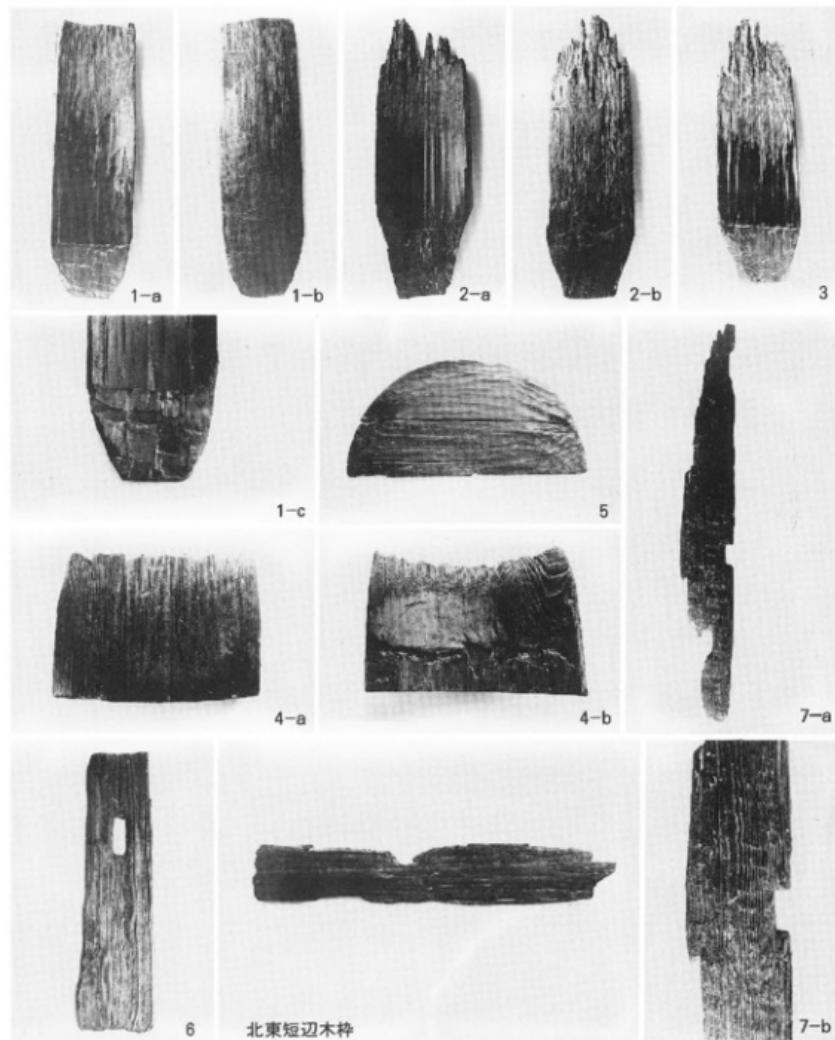


25



26

「井戸」出 2 遺物（土器）



「井戸」出土遺物（木器）

津山市埋蔵文化財発掘調査報告 第39集

金井造田西遺跡

大崎南土地改良区は場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第2集

1991年3月31日 発行

発行 津山市教育委員会
岡山県津山市山北 520

印刷 有限会社 玉置印刷所
岡山県津山市川崎 793